

震災下での東北赴任体験記

中島 一紀



私が現在所属している東北大学に赴任することが決まった約1ヶ月後に東日本大震災が起きました。本稿では、震災後の東北に赴任するにあたって私が経験したこと、そこで感じたことについて徒然なるままに書きたいと思います。特に研究内容や人生・研究観、主義・主張についての内容は含みませんので、その点ご了承頂ければと思います。

3.11

2011年3月11日大地震の当日は前任校である神戸大学で通常どおり仕事をしていました。午後の仕事がひと段落した時にふとインターネットを開いてみると、どうやら東北で大きな地震があったとのこと。その時はそこまで深刻には考えていませんでした。しかし、家に帰宅し、ニュースでその映像を見たときにはその凄惨さに言葉を失いました。すぐに東北大学の先生（現在の上司）にメールを打ちましたが、もちろん返事などはありません。それから一週間くらいは、これまでの日本とは思えないような光景を、ブラウン管を通して目の当たりにしながら、自分では何もできない状況に焦燥感と失望感を感じながら過ごしました。その後、ようやく先方とも連絡がつき、無事であることと、そして予定通り4月から赴任できることを伺いました。

4月に仙台へ

仙台に行くことは決まったものの、どのようにして行くか、どこに住むかという問題があります。仙台空港は津波で被害を受け、東北新幹線も使えません。また、引越業者からも東北方面は無理だと断られ、仙台の住居・不動産関係もほとんど止まっていました。なにせ電気やガスなどのライフラインが途絶えていた状況ですから無理もありません。4月1日に仙台に行くことは難しいと半ば諦めていたところ、先生からホテルが取れたという連絡を頂きました。結局、妻と子供を神戸に置いて、私一人スーツケースと共に仙台に向かうことになりました。本当に大丈夫だろうかという不安と、どんな状況だとしても頑張るぞという気概の両方を抱いて、伊丹空港から山形行き的小型ジェット機に乗り込みました。桜も咲き始めていた関西からは一変し、真っ白な雪化粧の蔵王連峰の

中を山形空港に降りていく光景が印象的でした。山形空港からは臨時運行していたバスで仙台に辿り着きました。

東北大学にて

大学は沿岸部から離れているため津波の影響はなかったものの、震度6という強い揺れのため、建造物や研究室内は被害を受けていました。学生実験を行っていた建物が立入禁止となり、その中のものを運び出す作業が私の赴任最初の仕事でした。他の先生方と一緒に反応器や蒸留塔などを運び出しましたが、私だけスーツ・ネクタイ・革靴にヘルメットを被るという妙な格好で作業したのを覚えています。しばらくしてだいぶ状況が落ち着いてから、恩師や先輩、学会などでお世話になっている方々へ異動のご報告を行いました。その際、何人かの方からは温かいお言葉と共に、物資支援（具体的には、実験機器や試薬など）の申し出をいただきました。幸い、物流は徐々に始まっていましたので、実際に送ってもらうことはなかったのですが、別大学の自分に対してもそのような行動を起こそうとしてくれる気持ちに胸が熱くなりました。学会活動において人との「絆」を感じた瞬間でもありました。確かに思い起こせば、学会活動において人とのつながりを強く感じるがあります。たとえば、学会の懇親会でたまたま隣にいた人と後に共同研究をすることになったり、国際学会と一緒に行った人と数年後に同僚になったり、経験の浅い自分ですらそのようなことがこれまでに多くあります。人とのつながりは「偶然でもあり、必然でもある」ような気がします。

生物工学若手研究者の集い

さて、人とのつながりを述べたところで、というわけではありませんが、生物工学会には若手会という部会があります。生物工学に関連する全国の若手研究者、学生の相互交流を目的とした集まりで、毎年夏には“日本のどこか”に集まって夏のセミナーが開催されます。研究に関して情報交換したり、互いに切磋琢磨できる環境があると思います。皆さんも機会があれば、是非一度生物工学若手会を覗いてみてはいかがでしょうか。そこには偶然かつ必然的な？出会いがあるかもしれません。

<http://www.sbj.or.jp/division/young/>